

にしおの

脱サラして新規就農。 西尾に新しい特産を

おっ!



左から由美さん、拓也さん、和樹くん、浅井さん

ポポー、フェイジョア。何の名前か、ご存知ですか。ポポーは北米原産の果物で、強い甘みとなめらかな食感、バナナとマンゴーを合わせたような味が特徴です。フェイジョアは桃と洋梨を合わせたような味が特徴の果物で、ニュージーランドで盛んに生産されています。国内でもあまり栽培されていないこの2つの果物を市内で唯一栽培・加工・販売しているのが平原町にある「ゆたか農園」です。収

穫が最盛期を迎える夏にはブルーベリーやブラックベリーなどの果物狩りに、県内外から多くの人が訪れます。

この農園を切り盛りするのが、岡田さん家族です。東幡豆町出身の岡田拓也さん（吉良町）と北海道出身の妻・由美さんは、以前は県内の大学で非常勤講師を務めていました。ある時、由美さんの友人が宮むブルーベリー農園を訪れ、拓也さんは衝撃を受けます。「あまりのおいしさに感動した。当時の仕事に将来的な不安を抱いていたし、農業を仕事にしようと思いついた」。結婚を機に、新規就農を決意します。「就農に必要な30アールの土地を探さないといけないので決意してからが大変だった」。知り合いのつてを頼り、平原町で土地を貸してくれる地主さんを紹介してもらいます。柿畑だったその土地は長い間放置され、荒れ果てた状態。大学に勤める傍ら、スコップなどを使い、手作業で切り開いていきます。畑を借りてから4年が経過した平成25年、ついに農園を開園。由美さん、拓也さん、息

子の和樹くんの名前の頭文字を取り、ゆたか農園と名付けます。

新規就農に向けた準備を進める中で出会ったのが、浅井敏彦さん（熊味町）です。農園の近くで薪ストーブの薪を分けてもらっていた浅井さんに、拓也さんが声を掛けたのがきっかけ。農作業や鳥よけのネット張りを自然と手助けしてもらったようになり、今ではゆたか農園に欠かせない存在です。「農作業は楽しい。健康のためにもなるしね」と浅井さん。和樹くんも浅井さんを「おじいちゃん」と呼び、4人で旅行に行くなど、家族のような関係です。

開園して間もなく、テレビとインターネットでポポーとフェイジョアの存在を知った拓也さん。ブルーベリーなどが実らない秋から冬に収穫できることもあり、「面白そう」と栽培を始めます。しかし、全国を探しても栽培する農家は見つからず、自分たちでやるしかありませんでした。「果物は手をかけた分、いい果実が実る」とやりがいを感じる拓也さん。試行錯誤の末、安定して栽培できるようになりました。

ゆたか農園では、手作りジャムも販売しています。由美さんは「直接口にするものだから、栽培に農業は使



フェイジョア



っていない。ジャムは凝固剤や酸化防止剤を一切使っていないから安心して食べてほしい」と笑顔で話してくれました。農園の果物を料理やお菓子に使う店舗も増えています。「フェイジョアはさっぱりしていて、カルパッチョなどに合う。珍しい材料が新鮮な状態で手に入るのはすごくラッキー」とカフェ・オーシャン（寺部町）の牧一心さん。大切に育てた果物に手を加え、多くの人にその魅力を広めています。

「これまでやってこれたのは、平原の皆さんのおかげ。よそ者だった私たちを温かく迎え、気にかけてくれる。ポポーやフェイジョアを作る人が増え、抹茶に並ぶ西尾の特産になれば」と拓也さんは熱く語ってくれました。新規就農や珍しい果物の栽培など、挑戦を続ける岡田さん家族。土まみれのたくましい手が、これまでの苦勞を物語ります。西尾に根付いた岡田さん家族の志は地域の皆さんに支えられながら、多くの実りをもたらしてくれるのだと感じました。

（原田成美）